

フランコフォニーと オリンピック・パラリンピック

小松 祐子

フランコフォニー関係者にとって「オリンピックはフランス語の世界的なショーケース¹⁾」と位置付けられている。2021年夏の東京大会開催の記憶が新しい今、オリンピックにおけるフランス語使用の状況を確認し、「ショーケース」の意味や課題を検討する機会を持ちたい。

オリンピックの公式言語

オリンピック憲章の第23条により国際オリンピック委員会の公式言語はフランス語と英語であることが定められている。また係争時にはフランス語のテキストが優先されることも明記されている（同条第3項）。フランス語がこのように重用されるのは、近代オリンピックを開始したクーベルタン男爵（Pierre de Coubertin, 1863-1937）がフランス人であったためと説明されることが多いが、19世紀末の時点でフランス語が英語に勝る国際的地位をもつ言語であった歴史の名残であることを忘れてはならない。1989年に設立された国際パラリンピック委員会ではフランス語は使用されていない。

2013年9月に2020年大会開催都市が東京に決定した際には、皇族や有名人がフランス語で招致スピーチを行い、広く報道されて世間の注目を集めた。パンデミックによる1年の延期を経て2021年7月末から開催された東京オリンピック大会では、開会式をはじめ、競技案内、メダルセレモニーのすべてにおいてフランス語、英語、日本語（開催地の言語）の順でアナウンスが流れた。

フランコフォニー国際組織によるオリンピックでのフランス語推進

現在88の国と政府が参加するフランコフォニー国際組織（OIF: Organisation internationale de la Francophonie）は、そのミッションの冒頭に「フランス語と言語・文化多様性の推進」を掲げている²⁾。オリンピックにおけ

るフランス語の地位の推進は同組織の重要目標の一つであり、そのために2004年アテネ大会以降、フランコフォニー推進役「グラン・テモワン（大証人）」を任命している³⁾。国際オリンピック委員会、現地組織委員会と協力し、大会においてオリンピック憲章第23条が守られているかを確認し、大会終了後に報告書を作成するのがグラン・テモワンの任務である。2012年ロンドン大会ではカナダ総督（2005-2010）やOIF事務総長（2015-2019）を務めたミカエル・ジャン（Michaëlle Jean）、2014年ソチ大会ではアカデミー・フランセーズ終身事務局長（1999-）エレヌ・カレル＝ダンコース（Hélène Carrère d'Encausse）、2018年平昌大会では元仏文化大臣（2014-2016）フルール・ペルラン（Fleur Pellerin）と、名だたる文化人や政治家がこの役を務めてきた。2020年東京大会のグラン・テモワンには東京でも活躍する料理人ティエリー・マルクス（Thierry Marx）が任命された（2019年9月）。知名度において過去のグラン・テモワンに引けを取ることは否めないが、日仏のグルメ文化交流を梃子としてフランス語を推進しようという意図は理解できる。

マルクスの指名について、「彼の使命は、2020年東京大会においてフランス語の使用と視認性を奨励し、選手、役員、ジャーナリスト、そしてより広く一般の人々に提供される言語サービスが、オリンピック憲章に基づき、実際にフランス語で行われるようにすることです。」とOIFのサイト上⁴⁾で紹介されている（引用文中の下線は筆者による）。またマルクスも「フランス語という言語を通して、スポーツや博愛、社会的影響、環境への影響といったフランコフォンの価値に関するメッセージを伝えることができます。」と意欲を述べている⁵⁾。

東京大会におけるフランコフォニー推進に関する覚書

このような任務の遂行を保証するため、2019年11月21日、東京オリンピック・パラリンピック組織委員会とOIFとのあいだに「東京2020オリンピック・パラリンピック大会におけるフランス語とフランコフォニー推進に関する覚書」が調印された⁶⁾。

覚書には以下の4つの合意事項が挙げられている。

- セレモニーでのアナウンスがフランス語を含む公式言語で行われること。
- 情報や案内を（とりわけTokyo2020の公式インターネットサイトと

SNS上で)可能な限りフランス語で掲載すること。

- メディアからの要請がある場合に資料がフランス語で提供されることを、可能な限り保証すること。
- オリンピック・パラリンピック期間中にOIF グラン・テモワンのミッション遂行を支援すること。

OIFの目指す「フランス語の使用と視認性」について、覚書では「セレモニーでのアナウンス」と「情報や案内を可能な限りフランス語で掲載」に限定され、「言語サービスが(…)実際にフランス語で行われる」については、「メディアからの要請がある場合に資料がフランス語で提供されることを、可能な限り保証」とかなりのトーンダウンが認められる。覚書の内容にOIF側の妥協があることが窺われる。

しかしながらこの覚書の調印を、OIFのルイーズ・ムシキワボ(Louise Mushikiwabo)事務総長は、「フランス語とフランコフォニーの影響力のためのこの具体的な協力関係を、特に嬉しく思います。この調印は、言語文化の多様性を尊重する世界を目指す私たちの共通のビジョンを反映したものであり(中略)、次回のオリンピックを3億人のフランス語圏の人々が自らを認める重要なイベントにするために、フランコフォニーの力を結集するものです⁷⁾」と評価している。

2020年東京大会でのフランス語使用

先に述べたように、東京オリンピック大会において各種セレモニーのアナウンスではフランス語が使用された。世界中に流れるテレビ中継(とりわけ開会式、閉会式)の影響力は大きく、その点では「ショーケース」としての使命は果たされたと言えよう。

実務においてどの程度フランス語が使用されたかについては、グラン・テモワン報告書の公開が待たれるところである。ただ東京大会の準備段階においてすでに、カナダのメディアにより「今のところフランス語を目にすることはない」という指摘がなされていたことを紹介しておきたい⁸⁾。

選手村やプレスセンターの写真⁹⁾からは、標識や案内板の大半が英語のみであったことが確認できる。しかしこのことは覚書の規定(「可能な限り」)に反してはいないのである。

過去の大会における報告：2004年アテネ大会

東京大会のグラン・テモワン報告書の公開までには数か月を要するため、ここでは2004年アテネ大会の報告書¹⁰⁾をもとに、過去のオリンピックにおけるフランス語使用状況とそれに対する評価を確認したい。

アテネ大会のグラン・テモワンは、仏テレビ局(TF1, Antenne2, FR3)の社長を歴任したエルヴェ・ブルジュ(Hervé Bourges)が務めた。この大会は「201の異なる地域から7万人以上の観客、約21,000人のジャーナリスト、約15,000人のアスリートを迎えた」(p.9)とあり、パンデミックの影響によりほぼ無観客で行われた東京大会(参加選手11,000人、メディア関係者16,000人¹¹⁾)を大きく上回る規模であったことをまず確認しておきたい。

しかし、アテネ大会という「ショーケース」でのフランス語の使用がグラン・テモワンを納得させるものではなかったことが報告書からは読み取れる。

報告は微妙なものとなります。まず、公式スピーチや競技関係のほとんどの具体的な場面において、フランス語の地位は常に認められていました。しかし、国際的なコミュニケーション言語としての正当性は減じており、大会の運営に使用し続けることは、現実的な必要性によるものではなく、伝統的な制約であると考えられていました。(p.13)

オリンピック憲章第23条に則りフランス語の地位は保証されるものの、コミュニケーション上の必要は薄く、むしろ運営上の足かせとなる「伝統」とみなされていることがわかる。そして次のような欠陥が認められたと言う。

アテネ・オリンピックのコミュニケーションに不可欠な要素、つまり大会のロゴに始まり、国際的なテレビ中継に至るまでが、フランス語では用意されていませんでした。(p.13)

大会のロゴやテレビ中継は一般へのアピールがもっとも大きい部分であり、それらにフランス語が使用されないことは「ショーケース」の効果に大いに欠けることになる。

オリンピックはフランス語にとって素晴らしいショーケースですが、アテネではこのショーケースが十分に活用されず、光を当てられることもありませんでした。2008年の北京大会ではより良く活用されなくてはなりません。(p.13-14)

フランス語が十分に使用されない責任は運営側だけにあるのではない。より深刻なのは大会に参加するフランコフォン(フランス語話者)らの態度である。

通訳サービスがあるにもかかわらず、フランコフォンの選手やジャーナリストが英

語で話したがっていたことを、責任者らは残念そうに報告してくれました。(p.36)

国際共通語が英語であるというコンセンサスは世界中に浸透しており、国際的に活躍するアスリート、ましてやジャーナリストには英語の素養がある。通訳を使うよりも直接コミュニケーションするほうが好ましいのも当然であろう。求められない言語サービスを維持することには、伝統を守る以外の意義が認められないという厳しい現実がここに理解される。

グラン・テモワンは以下のような重要な指摘をしている。

スポーツ界、特にオリンピック界におけるフランス語の推進は、国連やEUなどの国際機関におけるそれとは異なる扱いを必要とします。国際的なスポーツ組織は、商業、セキュリティ、ドーピング、インフラなどの要素にますます関心を寄せていますが、これらの要素は、私たちの国や政府がコントロールすることはできません。(p.63-64)

覚書のような外交ルートによっては言語使用をコントロールすることができない現実があることを彼は指摘している。大会の商業化が進み、運営上の技術的条件や制約が増すなかではなおのこと、現実的な必要ではなく「伝統」に基づくフランス語使用を推進することには困難があるのである。

彼の報告は以下の提言により締めくくられている。

攻めの姿勢と現実性を兼ね備えた戦略を策定し、すべてのレベルで実行する必要があります。フランコフォニーの国や政府は、その責任を直視しなければなりません。複言語主義の挑戦に取り組み、国際舞台でのフランス語のプレゼンスを高めるために、フランス語を話すコミュニティ全体の総動員が必要です。(p.63-64)

OIF加盟国・政府の責任ある関与が求められるのであり、「コミュニティ全体の総動員」には各国の選手団やジャーナリストたち、さらには観客もが含まれるだろう。関係するフランス語話者全員の意識改革が求められることが示唆されている。

グラン・テモワンに対する評価

このようなグラン・テモワンの報告をどのように評価できるだろうか。その存在はフランス語の地位向上に貢献しているのか。これに関してカナダの仏語系メディアの記者が「オリンピックでのフランス語は危機に瀕しているのか」と題する記事のなかで、次のような指摘をしている。

OIF グラン・テモワンは、オリンピックの各大会中のフランス語の使用に関する報告書を提出する。長い間、その結論はきわめて憂慮すべきものだった。そして

その提言にもかかわらず、ほとんど改善がなされていない¹²⁾。

ここに述べられるように、毎大会の報告書はそろってフランス語の使用状況に警鐘を鳴らし、改善の努力を求めている。しかし効果は見られず同じような報告と提言が繰り返されていることに、この記者は苛立ちを隠さない。グラン・テモワンの無力の原因を説明するために、彼は次のような証言を引用している。

オリンピック・アカデミー協会副会長イヴァン・コスト＝マニエール (Yvan Coste-Manière) 氏は、大会にグラン・テモワンが参加することは、メンタリティを変えようとする意志よりも、アリバイとしての意味合いが強いと言う。「アリバイというのは、フランコフォニーを守るための政治力の弱さ、もっと言えば罪深い臆病さを隠すとともに、証明するものです。(中略) スポーツビジネスの陰に隠れては、フランス語の消滅は避けられないと思います。」

グラン・テモワンの活動が実効力をもたず、形式的な手続きになっていることが指摘され、フランコフォニー関係者の「臆病さ」が非難されている。オリンピックの場で、ビジネスの論理に押されずフランス語使用を維持し続けるためには、大胆な取組みが求められるのである。

パリ大会 (2024) に向けて

この記事には今後の展望も示されている。

希望はあるのか? 「はい」とイヴァン・コスト＝マニエール氏は答える。2024年パリ大会で軌道修正しなければならない、と彼は考えている。さもなければ破滅するだろう。「2024年のフランスは、この大会の開催を活かさなくてはなりません。この大会は、人権の国フランスの社会的結束、機会均等、均質な領土発展の証となるべきものです。ピエール・ド・クーベルタンについては、彼が誰であるかを忘れてしまった世代もあるかもしれませんが、その遺産を守らなくてはなりません。」

2024年パリ大会が大きな形勢挽回のチャンスであることは確かだろう。東京大会閉会式での引継ぎの際に紹介されたビデオからすでに、パリ大会をフランスのアピールの機会としたいという意気込みが伝わってきた。大会でのフランス語使用にも改善が期待されるが、楽観はできない。パリ大会で開催地の言語であるフランス語が使用されるのは当然であり、一時的な改善にとどまる恐れがある。最近のフランス人にはとりわけエリート層に国際的場面でフランス語よりも英語を話したがる傾向が見られるため、注意が必要で

ある。かえって「フランスでさえフランス語の使用はこの程度か」という落胆の結果を生むことさえが危惧される。オリンピックでフランス語を守ることの意義について、開催関係者が中心となり認識と理解を深め行動へと反映させる必要があるだろう。

結論にかえて

世界中の注目を集めるオリンピックでフランス語が使用されることは、フランス語の国際語としての地位をアピールする「ショーケース」の役割を果たし、きわめて重要な意味をもつ。フランコフォニー国際組織（OIF）は、その認識のもと、各大会にグラン・テモワンを派遣し、現地組織委員会と覚書を交わすことにより、大会でのフランス語の地位を保証しようと努めている。その効果が十分ではないという批判も見られるが、世界的な英語偏重傾向のなかでフランス語の国際的地位を保つことは、オリンピックだけでできることではない。OIFの政治的外交的な努力により衰退を食い止めているという見方もできるだろう。しかし覚書の内容にOIF側の妥協が見られることは事実であり、さらなる努力が求められることも確かである。

グローバル化の加速とともにとりわけ21世紀に入ってから、国際語イコール英語であるという認識が一般に強まっている。かつての国際語フランス語の地位は見る影もないと言えよう。しかし国際的に使用する言語に複数の選択肢があることは、多様性の観点から言って重要であると思われる。参加国・政府が88にまで拡大したOIFには、フランス語のみならず言語文化多様性の推進を目指す国際組織としての役割を果たすことが期待され、そのために世界規模のイベントであるオリンピックという舞台を十分に活用することが望まれる。2024年パリ大会での展開を注視していきたい。

* 本稿での引用文はすべて筆者による訳である。また参照したURLはすべて2022年2月7日に最終確認した。

注

- 1) Hervé Bourges (2004), « Les jeux olympiques : une vitrine mondiale pour la langue française », Rapport à M. Abdou Diouf, Secrétaire général de l'Organisation internationale de la Francophonie.
- 2) Organisation internationale de la Francophonie, « La Francophonie en bref ». <https://>

www.francophonie.org/la-francophonie-en-bref-754

- 3) グラン・テモワンは1994年アトランタ大会からフランス政府により派遣が開始され、2004年大会からはOIFがこれを引き継いだ。1998年長野大会には著名な言語学者のBernard Cerquigliniが派遣された。
- 4) <https://www.francophonie.org/loif-encourage-la-visibilite-de-la-langue-francaise-aux-jeux-de-tokyo-1854>
- 5) 日本におけるフランコフォニー推進会議, 『日本におけるフランコフォニー2020』, p. 8-9.
- 6) « Mémorandum d'entente sur l'usage et la promotion de la langue française et de la Francophonie aux Jeux olympiques et paralympiques de Tokyo 2020 ». https://www.francophonie.org/sites/default/files/2021-04/210412_Memorandum_langue%20fran%C3%A7aise_OIF_Tokyo%202020.pdf
- 7) <https://www.francophonie.org/tokyo-2020-memorandum-sur-lusage-du-francais-aux-prochains-jeux-olympiques-870>
- 8) « Le français invisible, pour l'instant, aux Jeux de Tokyo », le 22 novembre 2019. <https://ici.radio-canada.ca/sports/1400135/comite-olympique-international-francais-invisible-jeux-tokyo>
- 9) たとえば <https://www.parasapo.tokyo/topics/33482>、<https://rocketnews24.com/2021/07/30/1521548/> など。
- 10) Hervé Bourges, « Les Jeux Olympiques : une vitrine mondiale pour la langue française ».
- 11) <https://www3.nhk.or.jp/news/html/20210717/k10013144811000.html>
- 12) Robert Frosi, « Le français est-il en péril aux Jeux olympiques ? », Radio Canada, le 14 février 2020. <https://ici.radio-canada.ca/sports/1520529/jeux-olympiques-presence-francais-grand-observateur-francophonie-tokyo>